

誤れる良心の寛容論

2021年3月13日(土) 18:00~20:00

参加費無料

Zoomウェビナー

事前登録制

定員500名

講師

森本あんり

(国際基督教大学教授)



コメンテーター 小原克博 (同志社大学教授) 杉岡孝紀 (龍谷大学教授)
司会 岡野彩子 (大阪大学特任研究員)

● 講師プロフィール

1956年生まれ。プリンストン神学大学修了 (Ph.D.)。国際基督教大学人文科学科教授 (哲学・宗教学)、2012-2020年、同大学学務副学長。プリンストン神学大学とバークレー連合神学大学で客員教授。著書に『キリスト教でたどるアメリカ史』(角川ソフィア文庫)、『異端の時代』(岩波新書)、『宗教国家アメリカのふしぎな論理』(NHK出版)、『反知性主義』(新潮社)、『アメリカ的理念の身体』(創文社)、Jonathan Edwards and the Catholic Vision of Salvation (Penn State University Press) など。今回の講演は、最近著『不寛容論』(新潮選書)を下敷きにいたします。

【お問い合わせ】

宗教倫理学会事務局 龍谷大学深草キャンパス法学部 井上善幸研究室内

E-mail: yos-ino@law.ryukoku.ac.jp TEL 075-642-1111 (代表)

◆ 誤れる良心の寛容論 ◆

● 講演要旨

良心は、「良心に囚われる」「the dictates of conscience」などという表現が示すように、当人にとって不可抗的な権威を有しており、みずからの自由な意志で選択したり変更したりすることのできない規範を提示するものと考えられている。そうであるからこそ、良心は社会の一般的合意に対する「異議申し立て」の権原として認知されており、兵役拒否などの行為にも例外的な配慮が与えられてきたのである。

しかしまた、そこには固有の問題もはらまれている。良心が誤ることはあり得ないのであろうか。もし良心が個人を垂直の倫理空間に定立させるものであるならば、誰がその誤りを判断できるのであろうか。寛容とは、そもそも社会の一般的な判断とは異なる価値を許容することであるから、おおかたの理解では誤っていると思われるような良心こそ、寛容の対象でなければならないであろう。では、良心に起因する行為の自由は、どこまでが認められるべきなのか。

今回は、昨年末に出版された拙著『不寛容論』（新潮選書）を参照しつつ、17世紀のピューリタニズムという歴史的な文脈においてこの問題を検証したい。ニューイングランドは、良心の行為が新たな政治社会共同体の建設へと具体化した歴史的な実験の場であった。その過程において交わされた議論の検証から、多様な価値観が交錯する現代社会において、人々が平和裡に共存するための視座を得ることができればと願っている。

● 申込／参加方法

参加のお申し込みは、以下のURLでお願いします。

https://zoom.us/webinar/register/WN_5yZwFtHrQZWY8mQpgTWIHg

※パソコン・スマートフォン・タブレットよりアクセス・視聴いただけます。

(登録無料・定員500名)